委員会報告

表紙写真の選考を終えて

学会誌企画・編集委員会

学会誌第92巻の表紙写真を募集（テーマ：農業（水利）施設・構造物とそれらに支えられた農地・地域の景観など：現代の最新技術と苦労が垣間見える造形美・用の美など，2023年9月30日締切）したところ，28点の応募がありました。10月30日に審査委員会（委員長・柳本尚規東京造形大学名誉教授）を開催し，12点を選定したので，ここに報告します。

学会誌企画・編集委員会では，学会誌第93巻（2025年発行）も皆さまからの応募写真で表紙を飾ることとし，表紙写真を募集しています。

募集の趣旨および応募方法の詳細は，本誌64ページをご覧ください。たくさんのご応募をお待ちしております。

講　評

柳本　尚規（東京造形大学名誉教授）

カメラのシステムが変わって，写真も変わってきているようだ。これにはスマホが大きく関係している。

ファインダーでフレーミングすることがほとんどなくなった。ピントを合わせるという操作がなくなりその概念もなくなった。指先の操作でのばしたり縮めたりするから，望遠や広角といっていた概念が拡大と縮小，に変わった。

変化をいろいろ考えていると，どうもいま写真には思いを潜ませる，あるいはその思いを想像させる影のようなものがなくなったのだと思えてくる。望遠は見たい気持ちを実現し象徴にもなった。広角には一点への焦点化を拒む気持ちのやりとりがあった。

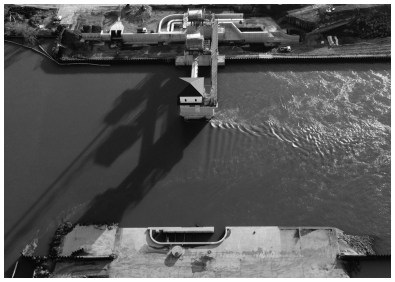
もっと大事な変化がたくさんあるが，スマホのカメラ機能はいまや世界をGoogleとAppleの視線に染め上げているという感じではないか。

問題はそういう標準化された映像をどのように活用できるか，どんな必要性から標準化されてきたかを思ってみることではないか。それが分かれば……というところだが，いまは解放されたその自由をどう味わえばいいのかと，方向を決めあぐねている状況ではあるようだ。

こんなことを書くのも，今回はとくに，もっとけれんみのある写真があってもいいではないかと思ったからだ。物事は正面から見るのではなく斜めから見ないと奥行きが分からないぞと口酸っぱくいわれた記憶がそう思わせるのだと思うが，奥行きの意味でもこのところ見ない凍結や寒風晒しの景観とか，肌にまといつくような湿度の景観とか，北海道や南の島々の景観もぜひ紹介していただきたいと思う。

第 92 巻表紙写真入選作品

1 号



芦野頭首工の改築状況

（千葉正雄）

老朽化した頭首工の改築工事。工期限定，工程厳守の条件から一部現地組立てのプレキャスト工法が取り入れられている。

この芦野頭首工は，日本海に注ぐ岩木川の流域にある。青森と秋田の県境にある白神山地に発して津軽平野を北上する川で，太宰 治が小説「津軽」に「津軽平野を流れる大小十三の河川がここに集り……」と書いた十三湖が河口だ。

太宰は金木の実家近くの小山から，「岩木川が細い銀線みたいに，キラキラ光って見える」，その「遠方に模糊と煙るが如く白くひろがっているのは，十三湖らしい」と，遠望した。

そして五所川原の叔母の家に一泊して育ての親が住む小泊へ会いに行くバスが十三湖にさしかかると，こんどは「人に捨てられた孤独の水たまりである。流れる雲も飛ぶ鳥の影も，この湖の面には写らぬというような感じだ」と近くに見て驚いた。

厳しい自然を想像させる写真だ。頭首工のすぐ先に十三湖がある。

2 号

日向用水の水路橋

（竹下伸一）

九州中央部に位置して，多くの物語や伝説がある高千穂は険しい山々に囲まれた山間地。その耕作を支えるのが山腹用水路だ。

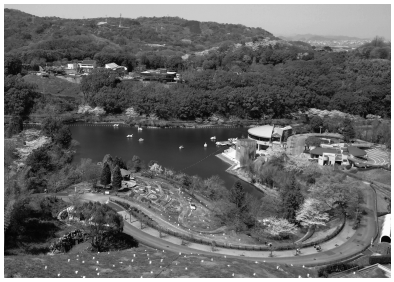
そもそもは阿蘇山噴火時の火砕流だ。火砕流が深い渓谷をつくって人為に大きく立ちはだかった。

高千穂には江戸末期まで開田地がなかったのだ。それを可能にしたのが山腹用水路の日向用水。1859 年に開水して以来，改修を重ねて現在にいたる。

高千穂渓谷を縫うように流れるのが五ヶ瀬川。多くの渓流・支流を合わせつつ流れくだる。日向用水はその支流の一つ，岩戸川の源流付近から引いた。

写真はいかにもささやか山中の景観。しかし大河，はじまりの一滴のように，このささやかな水路が自然との協働の源になった。

3 号



ため池を活かす・通谷池の多面的機能

（近田昌樹）

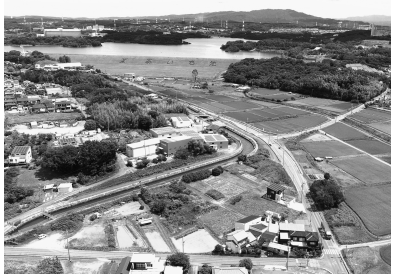
四国・愛媛県には山が多く地形も複雑で，いつも農業用水が不足した。だからたくさんのため池，調整池がある。その数は 3,000 を超えるそうだ。

その一つ，通谷池は，愛媛県伊予郡砥部町宮内にあるため池である。写真がため池の多様な役割を一目瞭然にしている。

池にはプランクトンの異常発生を抑えるための水を撹拌する湖面設置の噴水もあり，花見の名所化，ボートの遊びといった公園化などをあわせて複合文化的景観だ。

ため池が地域の環境整備の担い役になっている例は多い。池にはスワンボートとクジラボートも活躍のようだ。子どもたちの声もこだまする，のどかなひとときが想像できる。

4 号



愛知用水幹線水路と東郷調整池

（宮下武士）

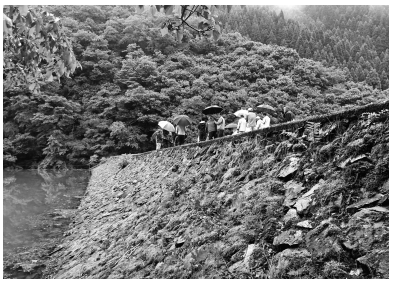
愛知用水は木曽川の水流を知多半島に導き，農業，生活，工業の各用水を供給する。東郷調整池はその中間地点につくられた，東郷町，日進市，みよし市にまたがる人工池だ。

はじめは農業用水を中心に計画されたが，高度経済成長下，次第にそのウェイトは工業用水等都市用水の方へ移ってきた。写真からその推移が想像できる。

これら 3 市町は，名古屋市と豊田市の間にある。両市への通勤・通学圏として住宅地開発がすすむ。企業の立地もすすんでいる。そして調整池を地域の文化環境を高める役割の要にしようと試みが続いている。

いまやレガッタ競技のメッカにもなった。写真は池の存在の絵解き図だ。

5 号



地域をまもる水物語 栗栖池

（合田　弘）

栗栖池は，兵庫県たつの市新宮町奥小屋奥麦子（おくむいご）～牧（まき）にある灌漑用アースダム。土を台形状に形成した土堰堤だ。

一級河川揖保川の支流である栗栖川は，途中が土砂で埋もれて伏流水となる。水量が乏しい。そこにこのため池，栗栖池だ。池の助けで灌漑地域が広がった。

ふだんこのため池にはひとかげがない。新宮町の秘境だそうだ。なにしろたつの市の北端に位置し，足の便はすこぶる悪い。最寄り駅からも歩いて 1 時間は優にかかる。ようやくたどり着いてもその道すがらの雰囲気から，いまはついえた山城跡，のように目に映るかもしれない。

水が，人が生きていくうえでどれだけ必要だったか，その大きなテーマの歴史を考えさせてくれる 1 枚の写真だ。

6 号

世界農業遺産の棚田を潤す落立堰堤

（田口　保）

落立（おちたて）堰堤は，ひろく農業文化を対象とした世界農業遺産に認定された「高千穂郷・椎葉山地域」の宮崎県高千穂町にある。そして「つなぐ棚田遺産」にも認定されている地域の棚田を潤している。

棚田は岩戸川の右岸にあり，阿蘇の火山活動により噴出した火砕流が長い年月をかけて侵食を受けた深いＶ字渓谷の上にある。

棚田は山間地においても稲作を行うために開発された技術。それを支えるのが山腹用水路でこれは 2 号の写真のところでもふれた。

落立堰堤は，開田により不足する用水を補給するために土呂久川（とろくがわ）につくられており，長大な水路の活用を広げようとした先人の工夫が推察できる。

堰堤の美しい水の流れはその思いを引き継ぐ思いを表しているように見える。

7月

農業水利施設とそれらに支えられた農地の景観

（青森県）

日本海側の七里長浜に沿って続く広大な砂丘地帯の青森県つがる市の屏風山地区は，津軽地方の代表的な畑作地域だ。なかでもゴボウの収穫が盛んで，ゴボウ出荷量日本一を続ける青森県内において津軽地方の有数な産地。冷涼な気候と一帯の砂地土壌が根菜類ゴボウの生育に適しているそうだ。

日ざしをいっぱいに浴びたスプリンクラ活躍の図になるこの写真は，排水等の設備も手厚く整備された生産環境を物語る。同時に，食材になるさまざまな野菜の生命ある姿も実感できて楽しい。こうやって生命がはぐくまれているのかと。なにしろ日本料理には欠かせないゴボウの役割を思えばこのはつらつとした景観がいい。

8号

つなぐ棚田遺産 飯見の虫送り

（合田　弘）

宍粟（しそう）市は兵庫県の中西部にあり，市域は広大で大部分が山地。南東30 kmに姫路市，南はたつの市，西は岡山県，北は鳥取県に接している。そこの飯見（いいみ）地区は古くから米づくりが行われていた歴史ある地域だ。

山の斜面に並ぶ棚田の光景が圧巻だといわれている。171枚の棚田が広がる。かつては千枚を超えたが，圃場整備を経てこの枚数になった。1990年代のことだ。

いまや都市部から多くの観光客も訪れている。その観光客の目には穂を実らせた棚田一つ一つは傾斜した地形上につくられたひな壇のように見えるだろう。

写真は，害虫を追い払って豊作を願う「虫送り」の光景。たいまつを手に夕暮れの約2 kmのあぜ道を練り歩く。田んぼを練り歩いてイネにつく害虫を追い払う。

美しい写真。空気感，匂いが伝わってくるようだ。

9号

稔りを待つ岩木川左岸から望む岩木山

（丹波　巧）

青森県の弘前，五所川原，つがるの各市にまたがる地域は，弥生時代の水田跡が発見されるなど，もともと水田農業の歴史，その文化の発達が知られてきた。

そしていまも岩木川統合頭首工から取った水を運ぶ用水路が，県内有数の穀倉地帯であるこの地域を支えている。岩木山のふもとだ。

太宰の「津軽」には岩木山は随所に登場する。そしてその美しさが語られる。「富士山よりもっと女らしく，十二単衣の裾を，銀杏の葉をさかさに立てたようにぱらりと開いて左右の均整も正しく，静かに青空に浮んでいる。……嬋娟（せんけん）たる美女ではある」と書いている。嬋娟，姿があでやかで美しい美女だと。

いやが応でも目に入る岩木山は，人々の垂直錘のような役になってきたかもしれない。農業はそういう錘の風景とともにあることをあらためて教えられる写真だ。

10号

日本初の蒸気ポンプ施設

（北川　孝）

豊郷町（とよさとちょう）は，滋賀県の東部（湖東地方）に位置する犬上郡の町。稲作が古くからの主産業だが，水利に恵まれない土地で水争いが絶えなかったという歴史がある。写真はその解決をめざしてつくられた揚水施設の様子だ。

蒸気動力によって往復ポンプを動かして地下水をくみ上げる例は日本で最初の快挙だったそうだ。石炭でボイラーを焚き，その蒸気を動力として揚水した。エンジン先進国イギリスの新鋭機を使った。最新装置の出現が時をおかずに日本の米づくりにも使われるようになったわけだ。

米穀の豊穣を願ってつけられた「豊郷」という地名をつけた豊穣への願いの強さが，イギリスの技術を探し当てたともいえる。

11号

急斜面で合流する日向用水

（竹下伸一）

高千穂の山腹用水路については，火砕流の“お椀のフチ”に水路があり内側の棚田にまんべんなく水を送れる装置がそれだ，と上手な比喩をする例もある。

急峻な山腹斜面に作られた水路で何度も改修を重ねてきた。写真は複数の水源で取水されそれぞれの山腹を流れてきた水が途中で合流するところだ。テレビの「ブラタモリ」もここを訪れているそうだ。

なぜ，そしてどう造ったのかと，そのいきさつへの想像が写真を見る目の奥に渦巻く。なぜというところでは耕作の強い必要性を，どのようにというところでは河川の氾濫を防ぐ堤をつくる見込みをどのようにして測ったかなど，土木技術の歴史を思うようになる。

世界の各地には，土木技術という科学や進歩観だけでは理解できない建造物がたくさんある。高千穂にも「たくさんの不思議」がたくさんある。

12号

初冬の洛西用水右岸導水路下流

（脇谷芳招）

京都洛西地域の農業を支える桂川の堰，一の井堰は京都市内最大の農業取水施設。いまもなおここから取水する幹線用水路が，洛西地域の農地の灌漑機能に加えて地域の雨水の排水機能にも，役割を果たし続けている。

堰のある桂川の渡月橋に近いその辺りは観光の名所。京都屈指の桜と紅葉の名所だ。堰もまた嵐山の姿を水面に映して風景の大事な役割を担っている。

物事をとどめたり分けたりする基点の＜せき＞は，川なら堰，道なら関といっただろうから，ふと立ち止まり区切りをつける感慨に重なってくるのではないだろうか。この感慨が写真のような美しい風景をつくりだす，つまり風景は私たちがつくりだしているのだという思いも湧いてくる。